山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第21号（2006. 3）

高等学校における授業研究の実際

―― 高知商業高校第７回授業研究会での指導事項 ――

桒原　昭徳

The Practice of Teaching Design Research in High School
―― Teaching Points for Teachers in 7 th Teaching Research at Kochi Commercial High School ――

KUWAHARA Akinori

(Received January 10, 2006)

キーワード：高校授業、わかる授業、授業検討会

１．はじめに

筆者は1968年度から今日にいたるまで、継続的に学校教育現場での授業研究にも携わってきている。（注１）主要なフィールドは小学校と中学校であった。その後1980年４月からは幼稚園と保育所に関連する実践的な保育研究が加わって、「幼小中」の子どもの学習や生活を研究対象とすることになった。また、それ以後、「幼小中」以前の子どもの生活についても身近に知ることとなった。というのは、保育所児との継続的な散歩活動を体験してきたし、最近になって４人の孫たちの出生もあったからである。けれども、高等学校での継続的かつ本格的な授業研究については、それまでの35年の間、まったく体験することは無かったといってよい。ここ3年間にわたる高知市立高知商業高等学校（注２）での授業研究の体験が、厳密な意味での最初の機会であった。

たしかに、これまでに福岡県高等学校家庭科教育研究会（福岡市）および福岡県立築上西高等学校（福岡県築上郡椎田町）において、高等学校の教師に対する「わかる授業」に関する講演の機会はあった。しかしながら、それらは授業研究と呼べるものではなかった。

2005年12月２日（金曜）の午後、高知商業高等学校において、筆者が関与し始めてから通算7回目の授業研究会が開催された。

本論で取り上げる高校授業研究の舞台となる高知商業高校においては、2003年度より３年計画で授業改善を直接的な目標とした研究会が発足した。第１回目は、桒原による講演「わかる授業、指導のポイント」を同校の約60名の先生方に聴講してもらうことから始まった。その年の6月10日のことであった。（注３）

初年度の2003年度には、上記の講演を含む３回の授業研究会が開催された。２年次には２回、そして最終年度の2005年度にも２回の授業研究会が開催された。足かけ３年で、計７回の授業研究会が開かれたのであった。筆者は、全７回の授業研究会のすべてに参加して、授業の参観や研究協議への参加をするとともに、研究会の終わりには必ず60分程度の

指導講話を行なってきた。

本論で取り上げる2005年度12月２日の授業研究会は、最終年度の第２回目にあたり、３年計画の授業研究の最終のまとめの研究会として位置づけられることになった。

高知市教育長名で栗原に宛てられた「講師依頼」によれば、当日の研究会の正式の名称は「高知市立高等学校教職員研修Ⅱ（全日制）」であり、主催は高知市教育委員会であった。研究会の事前連絡や当日の運営・研究協議の司会等も、高知市教育研究所・研修班の岡崎伸二指導主事が当たった。同研究所の所員として所属されていた先生方、指導主事の先生方も参加された。また、高知商業高校側からの事前連絡等は下坂速人教頭が当たった。

第７回目の授業研究会当日（2005年12月２日）の日程は次のとおりであった。

１４時１５分～１５時０５分、研究授業（若年教員フォローアップ研修）（注４）
　○　西岡先生（２年次）現代社会
　○　川村先生（２年次）英語
　○　松並先生（４年次）簿記
　○　金子先生（３年次）会計
　○　脇　先生（４年次）情報処理
１５時１０分～１５時５０分、授業検討会
１６時００分～１７時００分、全体会、司会（高知市教育研究所、岡崎伸二）、
　＊講話（山口大学教育学部、栗原昭徳）
１７時００分～１７時１０分、質疑応答
１７時１０分～１７時１５分、閉会行事、挨拶（柳井正持校長）

上記の＊印を付けた栗原担当の講話については、講話までに全４ページの手書き資料を準備した。筆者は、以下に示すように、大きく次の５点にわたって話す予定にしていた。

わかる授業を創る
― 指導方法と学力づくりのポイント　　2005.12/2.16:00-17:00
栗原昭徳（山口大教育）

１．「食事」と「授業における学習」の相似点
２．授業で育てる「３つの学力」
３．授業改善のポイント
４．本日の授業を参観して
５．今後の課題

栗原の講話に先立って、当日の授業者５人によって教科別分科会の協議の感想が述べられた。そのこともあって、栗原の講話は、上記の要項の順番どおりではなくて、５人の授業者の感想をうけて、最初に本日の５つの授業を参観して気付いた「授業の改善点」の指摘から始めることにした。授業を公開した５人の教師が、経験２年から４年の間にあるので、講話も授業を実施する際の教師としての初歩的な心構えから、具体的な教材の解釈と指導技術にいたるまでの幅広い内容となった。要項の「４．本日の授業を参観して」の部分がそれに相当する。講話は１６時０８分から始めることになった。

上記のような柱立ての要項の記述と当日の講話の内容に加えて、本論の執筆に際しては、さらに分かりやすくするための加筆修正を施した。

２．本日の授業を参観して

（１）金子教諭、２年会計「連結財務諸表」

栗原の参観は１４：１０～１４：２４

○授業開始の仕方に教師の「指導観」のすべてが反映される

公開授業の開始時刻の定刻は14時15分であった。しかし、筆者は定刻５分前の14時10分すぎには教室に入り、授業の始め方や学習の準備の状態から参観することにした。

生徒たちの中には、机の上に教科書やノートなどの学習用具を出している生徒もいるが、出していない生徒もいる。この生徒自身による学習準備は、どの教科の、どの授業時間であれ、かならず授業の初めの部分で必要となる活動である。年間1000時間の授業時間数があるとすれば、12月初旬の段階では、学年始めの４月から単純に計算してみると約８ヶ月、つまり１年間の三分の二が経過する。これまでに生徒たちは600回を越える学習準備を体験してきたことになる。だから、すでに学習準備に関しては習熟していなくてはならないのである。高等学校においても、教師集団が協議の上、おおよその学習準備に関する指導についての基本的事項を確認して、日々の授業の中で実践する必要がある。

学習準備の指導の段階は、おおよそ次の段階を想定することができる。

① 授業の開始時刻を意識して、チャイムの合図で席に着くことができる。
② 教科書・ノート・筆記用具などの学習用具を机の上に出す。
③ 教科書・ノート・資料などを開いている。
④ ノートに日付や本時の学習テーマなどを書いている。
⑤ 教科書を読んだり、資料に目を通したりなど、自習をすることができる。
⑥ 学習係を中心に自習を始めたり、班での自主的な学習活動を始めたりする。

以上のような学習準備の段階は、たとえ小学校１年生の学級であっても、①から⑥までのすべての項目の指導が可能である。ということは、児童生徒が身に付けている学習規律の実態には、学習内容とは違って、学年段階や学校段階によるレベルの高低は無いということである。児童生徒たちが学習規律を身につけているかどうかの差異は、じつは教師側が意図的に指導しているかどうかの差異にほかならないのである。

学級で授業を始めるときの挨拶の言葉や挨拶の仕方などに関する活動、つまりは「日直の活動」も、同じように学年始めから数えると、600回を超えるはずである。日直活動は授業の終わりのときにもあるので、じつはこの時点ですでに1200回も練習していることになる。だからこそ、日直活動もすでに習熟していなくてはならない事項である。

○教壇での教師の「表情」

授業中の教師は、大半の時間を子どもたちの活動を見守りながら、子どもたちと対面しながら、対話をしながら過ごすことになる。だから、教師が授業中の自分自身の表情を自覚する必要がある。

意外と自分の授業をしているときの姿を、教師自身が見ることは少ない。まずは、一度でいいから、できるかぎり早目に公開の授業研究でもして、教壇に立っているときの自分の姿や表情を、そして教科書を音読しているときの自分の声をビデオに収録して自分で視聴することをお勧めする。

暗い顔の表情をしていないか、おどおどしたり、子どもたちが安心できないような表情や仕草をしたりするようなことはないか、発声や発音に聞きづらい話し方の癖はないかな

ど、自分が気付きさえすれば、治すことは意外と簡単である。

かつて優秀な実践家の一人であるO先生に、筆者が伝えたことがある。

「O先生、小学校1年生に向かって話すのだから、もっとにっこりしてごらん。コツは、口を横に広げて歯を見せるようにしてニッコリと微笑むことです」と。入学式直後の学級指導を参観したあとで伝えたのである。後日、そのO先生からの便りには「栗原先生から言われて、毎朝、歯を磨くときに鏡を見ながら口を横に広げてニッと笑うのを練習しています」とあった。以前から見事な授業を実践されてきたO先生だが、その後の授業に、さらに磨きがかかったことは言うまでもない。

○教壇での教師の「語り」

教職とは、子どもたちを前にして「話をする仕事だ」と言い切っても過言ではない。

授業における教師の仕事は、どうしても子どもたちに向かって語りかけることが中心となる。だからこそ、教壇での教師の「語り」には、ことのほか留意する必要がある。

私自身にも、初めて教壇に立つことになった新任教師時代の苦い思い出がある。初めて小学校3年の子どもたちの前に立った日、子どもたちの射るような視線に耐えることはできなかった。自信をもって話すなどとは程遠い、恥ずかしがりながらの話であったことを思い出す。教師として子どもの前に立つことになったならば、意識して「話す技術」を習得しなくてはならない。

話し方には、「喋る」、「話す」、「語る」の3つを区別することができる。

「喋る」とは、いわゆる「おしゃべり」のことであって、日常生活の中での軽い会話や取り止めのない話を指すことが多い。「話す」とは、「放つ」である。口から出た言葉は、わが身から離れていくといった程度の事柄を伝えることである。

授業での教師の話し方は、「語る」であってほしい。「語る」とは「騙る」である。落語の語りが最後の「落ち」に向けて徹頭徹尾仕掛けられているように、教師も子どもたちの「あっ、わかった(Ach!)」に向けてすべてを仕掛けなくてはならないし、構造のある話をしなくてはならないのである。

「語る」ためには、教師自身による明確な学習内容の理解の上に立って、子どもにとって教材内容がわかりやすい順序や形になっていることである。基本的には大きな声で、汗をかくくらいに本気で、身振り・手振りも入れて呼びかけなくてはならない。そして、気をつけなくてはならないのは、教師の表情も、じつは「語り」の一部であるという発想である。

○教師の姿そのものが子どもたちへのメッセージである

教師からの語りは最大のメッセージである。しかし、教師からのメッセージは、ほかにもある。授業中、教室の外の廊下を歩く人を、教師が一瞬だけ見たとしよう。そのときの教師の視線に、何人かの子どもが気付いてしまう。それは、教師自身が廊下を歩く人を気にしているというメッセージとなり、何人かの子どもの意識を授業の外に連れて行ってしまうことになる。

だから、授業の名人といわれる教師たちの視線は、いちばん後ろの列に着席している子どもよりも前と、左右の一番はしっこの列に着席している子どもの内側の範囲の中で動きつづける。たとえ授業公開の場面であっても、決して授業を参観している同僚の視線や姿

に目を移すことはない。同じように、教室の外を賑やかに他クラスの子どもたちが通ろうとも、トンボや蝶が教室に入ってこようとも、不必要な場合には視線すら投げかけることはない。

さらに、授業中、教師が不用意に教室の掛け時計や自分の腕時計を見ることもしない。この時計をみる動作は、「もうすぐ給食の時間だよ」とか、「この授業が終わったあとの休憩時間に誰と何をしようか」などの思いを触発するメッセージともなってしまう可能性がある。だから、心ある教師は、腕時計の文字盤を腕の内側にして付けるとともに、時間や時刻が知りたいときには、教科書を見るときの視線の範囲の中で読み取るようにしている。

○復習事項「買収と合併」の扱い

初めて会計の授業を参観することになった筆者にとっては、単元名の「連結財務諸表」を見ただけでは、どのような授業になるかは予想もつかない。しかし、金子先生は大学で会計学を修めた専門家と聞き及んだ。だから「連結財務諸表」という専門用語を見ても教師自身が動じることはないし会計授業を始めて２年目の生徒たちも、ごく当然のように専門用語を駆使して授業に参加している。教師は本時の目標の①「企業グループ全体を評価するという視点から、連結財務諸表の意味と有用性を理解する」を達成するために、導入の10分間で生徒たちが「前時の復習のために買収と合併の説明について考え、発表する」という学習活動を仕組んでいる。生徒たちの「学習活動」を期待するがゆえに、学習指導案中の「学習活動」の中に「説明を考える」および「発表する」という動詞の言葉を使用しているのである。

教師の「買収と合併をいちばん簡単に言うと？」の発問に対して、一人の生徒が「買収は会社を買って、合併は同じような立場」という意味の発言をした。

たとえ復習であっても、重要な専門用語の一つであるから、それらの言葉を教師がカードに書いて準備すると良い。そうすることにより、
①まずは生徒全員の目をカードに向けさせる、
②カードにより視覚化された漢字の意味から予想させる、
③黒板のところに出て行って指示棒を使って説明する、
④できれば聞き手に問いかけるような応答的な発表を心がける、
⑤聞き手の中から質問や意見が出されて発表者が答える、
⑥発表や問答に触発されて、聞き手の中から新たな意見が出てくる、
など、文字通りの「活き活きとした動き」を誘発するための手立てとなる。

○わかる授業は生徒の既知既習の知識や技能の上に成り立つ

「学習活動」欄の2番目には「企業グループについて考える（思いつく企業グループ名を発表する）」とあり、これまた生徒たちに対しては身近に感じることのできる内容と活動が期待されている。だからこそ、教師側が、いきなり「グループ名をあげなさい」というのではなくて、テレビのコマーシャルなどの事例をヒントとして一つだけ教師が挙げて、そのあと同じような「グループ名」を上げるのであれば、生徒たちの活動は活発となり、多種多様なグループ名を発表するに違いない。

わかる授業を成立させるためには、生徒たちの既知既習の知識・技能を元にしながら未知未習を問うという原則を念頭に置いておかなくてはならない。

○商標の提示は、教師の手書きではなくて拡大コピー等で正確に

企業グループが出来上がった背景や企業活動の国際化・多角化を考えるために、会社の商標を問題にした。その事例として生徒たちが日ごろから目にしていると予想される「キッコーマン醤油」の商標（マーク）が取り上げられた。生徒たちにとっては分かりやすくて興味の湧きやすい事例であった。しかし、そのとき教師は商標をチョークで板書したのである。そうではなくて、できればきちんとしたキッコーマン醤油会社の商標を準備したい。この場合であれば、拡大したカラーコピーや実際の看板の絵の形で教材として提示することである。きちんとした教材として提示する方が、生徒には分かりやすいし、時間の節約でもある。

ついでながら、キッコーマン醤油の商標の中の「萬」の字は「万（マン）」の旧字であり、「萬」の字の外側を囲んでいる六角形の部分が、じつは「亀甲（きっこう）」であり、あのマーク自体が「亀甲萬」の意味を表していることにも気付かせたい。そのときの発問は「なぜこの商標がキッコーマンの会社のものとわかるのか」でよい。

そのような学習を済ませると、生徒たちは、ほかの会社の商標を見るときにも、同じように商標に隠された意味を探るであろう。

教師の示す事例は、あくまでも模範的な事例であり、これを示すことにより、さらに発展的な学習が期待されなくてはならない。（このようなねらいを持って模範的な事例を提示しながら、さらに発展的な学習を展開していこうとするのが、いわゆる「範例学習」という教育方法なのである。）

（２）脇教諭、１年商業「表計算ソフトウェアの活用、応用編」

栗原の参観は１４：２５～１４：２９

○明確で、分かりやすい課題提示

生徒は総合ビジネス科の１年３ホームの33名。本時の内容・目標として、指導略案には、「４～６人一組の班に分かれ、課題に対して班員で知識と技能を共有しながら解決していく。最後に班別に発表を行い、各班の課題解決について比較・検討・確認を行なう」とある。

生徒に課された《研究課題その１》の最初には「次の資料は、あるインターネット通信販売業者の売り上げデータを示したものである」とある。その下には「お歳暮セットドットコム注文一覧表」というデータが示してある。データ項目として、顧客コード、お客様名、商品コード、数量、単価、売上金額などの欄が設定してある。さらに、5つの処理条件が提示してあり、4つの問題に答えることが要求される。

以上の課題のほかに、もう一つの類似の課題《研究課題その２》が準備されている。「基礎学力テストのクラス別平均点を集計した年間成績一覧表を、処理条件にしたがって作成しなさい。」これにも、一覧表（データ）と処理条件、４つの問題が準備されている。

７つの班に対して、２つの課題のうちのどちらかが割り当てられていて、参観のために私がパソコン室に入ったときには、すでに生徒たちはパソコン画面に集中しながら、入力作業に取り組んでいる真っ最中であった。逸脱する生徒は一人も見られない。

○入力作業は活動そのもの

課題が明確に示されており、生徒たちの既知既習の情報リテラシー（パソコン技術）をもって対応すれば解決できる課題となっている。だから、生徒たちは既知既習の知識や技能を元にして取り組みさえすれば、目の前の未知未習の学習内容がいずれ50分後には既知既習の内容として獲得できるという確信のもとに、自力で入力作業（それは学習活動にほかならない）を進めているのである。

生徒たちのキーボード上の作業（学習活動）の成果は、パソコン画面上に刻々と示されている。その画面が、さらに次に生徒たちがしなくてはならない仕事（学習活動）の方向性を指差すので、ますます高次の自主的な学習活動が可能となってくる。

（3）西岡教諭、

1年現代社会「新しい人権～肖像権・プライバシーの権利・知る権利・環境権～」

粟原の参観は１４：３０～１４：３９

○資料の力・資料の身近さが生徒の参加を促し「わかりやすい授業」が実現する

学習指導略案中の指導観の箇所に「生徒が分かりやすいように、事例をたくさんあげて、身近なところで人権に関わっていることに気づかせたい」とあるように、生徒に「わかる授業」を実現したいとの授業者の思いが各所に見ることのできた授業である。

学習素材として、たとえば生徒に身近な携帯電話により撮影された写真と肖像権、芸能人やスポーツ選手の肖像権、最新の週刊誌の見出しの中のプライバシー、夜間の航空便・関空・トンネルと野生動物（ウサギ）をめぐる環境権などである。

生徒たちが授業に参加しやすいと感じるのは、やはり生徒たちの身近な日常生活の中で見聞する具体的な「物事」なのである。それは幼稚園や保育所の幼児でも、小学校の児童でも、中学校や高校の生徒でも、変わることはない。

ここで言う物事（ものごと）ないしは事物（じぶつ）とは、①物（②者＝人）と③事を指し、この世の全ての環境（物と人と事）を指している。これを「環境を通して」という間接教育論として発展させると、①「物的環境を通して」であり、②「人的環境を通して」であり、③「事的環境を通して」である。

○音読は最も簡単に取り組める「活動」である

西岡先生の指導案の各所に、「音読」という言葉が見えることも、「わかる授業」への授業者の願いの現われだと受け取った。

たとえば、目標の①関心・意欲・態度の箇所では、「教科書音読の時に、教科書を意欲的に読むことができる（線を引くことができる）」、②技能・表現の箇所では「教科書の音読を、大きい声で、ゆっくりとしたスピードで聞き取りやすく読むことができる」との記述があり、授業者が高等学校の授業においても音読を重視していることが見て取れる。

「本時の展開」においても、学習活動の欄の中に「教科書音読」が２箇所ほど予定されている。西岡先生は、授業の中で生徒の一人に指名をして、教科書の「プライバシーの権利」の部分を音読するよう指示した。すると女子生徒が自席で音読をし始めた。そのほかの生徒は、静かに教科書の記述を目で追った。

授業における音読には、次のような教育的な意義がある。

①音読は、全員の生徒の目を教科書の特定の部分に注目させる。

（よそ見、手悪さ、私語などをしていては、音読をすることは不可能である。）
②生徒自身の活動であるので、生徒自らが授業に参加しているという実感が持てる。
③音読をするためには、文章の意味を理解しなくてはならない。
④黙読とは違って、音読はゆっくりとしたスピードでものを考えることになる。
⑤音読は、学習内容の世界に入る手立てでもある。

小中学校の授業においても、高等学校の授業においても、もっと音読が重視されなくてはならない。授業始めの本時の学習部分の音読や教師の範読だけですませて、1時限の授業の中で、それ以外にまったく音読をさせない授業が多い。授業の中での「部分音読」や、子どもたち全員による「一斉音読」がもっと多用されてよい。授業の中で問題になっている箇所を考え合ったり、教師の発問に応答したりするためには、その箇所を音読しさえすれば、おのずと答えは見えてくるのである。

小学校低学年の子どもたちに、一度も音読をさせないままに、高度の読み取りをさせるような高学年的な授業すら参観したことがある。西岡先生が、高等学校の授業においても音読を学習活動の一つとして位置づけたことに深く感心させられた。

○音読のさせ方の基本は句読点への留意から

小学校中学年くらいまでは、句読点の名称については「点と丸」と呼んでよいであろう。しかし、「点と丸」を意識した音読は確実にできなくてはならない。小学校低学年の子どもたちが実際にやっている「点と丸」を意識した音読の方法がある。それは、点「、」のところで1拍ほど休むために教師が手をたたいたり、首を縦に振ったりなどの「動作化」をするという方法である。丸「。」の場合には、2拍ほど動作化をしながら休むのである。この方法を習得すると、たとえ小学校低学年の子どもたちでも「一斉読み」が上達する。中高校生であれば、まずは教師が点と丸を意識して音読しようとか、もっと聞き手のことを考えて音読しようとかの注意を与えるだけでも音読は上達する。

ちなみに「句読点」というとき、「、」と「。」のどちらが「句点」で、どちらが「読点」なのかという質問を、私の大学生に向けの講義の中では必ず質問することにしている。時には、プロの先生方にも同じ質問をしてみる。じつは「。」が句点であり、「、」が読点である。これを逆に覚えている大学生や現場の先生は多い。

私は次のように説明することにしている。「古池やかわず飛び込む水の音」と一句詠むと、一つの情景が浮かぶ。いちおう完結した一文だからである。このように一つの文の終わりに区切りとして付けるのが「句点（。）」である。読点（、）は、読むときに区切らなくては意味がわからなくなるので「読み点」と覚えておきましょう。これなら、大学生や教師だけではなくて、小学校高学年児童や中高生にも、簡単に理解できる。

○基本的な用語、キーワードは覚えさせること

音読や声に出しての復唱には、さらにいくつかの効用がある。

一人の子どもに音読をさせてみると、当人が理解できているか、理解できていないかが明らかとなる。だから、授業や家庭学習などで音読を練習することには、意味がある。

もう一つの効用は、音読をすると、その文章の理解が深まるとともに、覚えてしまうということである。子どもは、大人ほどには「覚えること」に、苦を感じていない。

たとえば、小学校２年生の２学期に学習する「掛け算九九」を、学習の当事者の小学校２年生の兄や姉よりも先に、幼稚園の弟や妹が先に覚えたという話は多い。どうやら単純な言葉の記憶の臨界期は、ほぼ６歳前後らしいのである。今から約1000年前の我が国の平安時代の子どものための教科書（と言ってもよい）「口遊（くちずさみ)」には、掛け算九九が縦書きのまま収録されている。日本人の生活の中での体験から生まれた知恵である。子どもにとって言葉の記憶は、大人が考えるほどには困難を伴わない。いわば遊びと同じように「口ずさむことによって」、簡単に覚えることが可能なのである。

このことは高校生にとっても当てはまる。西岡先生の人権授業でいえば、個人情報保護法や情報公開法などの言葉は、一度発音してみれば覚えることが可能な言葉であり、覚えさせておきたい言葉である。

○書くことも集中を作り出す「活動」である

西岡授業の指導案の中には、「環境権の説明をノートに記入」という記述も見える。書くことも、音読と同じように、子どもたちを集中させ、ゆっくりと考える機会を与える。公開授業などにおいて、えてして忘れられやすい学習活動である。

（４）松並教諭、１年簿記「株式の発行と社債の発行」

粂原の参観は１４：４０～１４：４９

○専門用語を使って、専門的な活動をしている生徒たち

本時授業の単元は「株式会社の記帳」、内容は「株式の発行と社債の発行」である。目標は「①株式会社には、資金調達の方法で株式の発行と社債の発行があり、その仕組みや仕訳の違いについて理解する。②問題を解く上で、ポイントを見つけ、それを解答に結びつける力を身につける」である。

入学して８ヶ月足らずの1年生の簿記授業であるが、すでに専門的な内容に取り組んでいる。しかも、電卓を駆使しながらの学習活動になっていることも良い。

○問題を解く、計算機を使う、メモする、板書する、生徒に発表させるなど、意図的に「活動」を仕組んだことが良い

生徒たちが活動しやすい授業となるように、

・あらかじめ教師が模造紙に書いた問題が各班に配布されている。
・３・４人のグループで、４つの練習問題のうち１問を受け取り、解答を見つける。
・問題をグループで確認し合い、その解答の計算方法やポイントを出し合う。
・板書も生徒の代表がおこなう、などの工夫がなされている。

とりわけ、下線を付した「板書を生徒がおこなう」点は注目に値する。さらに自分の班の板書の「解説を代表者が行なう」ということは生徒自らが黒板の前に立って、聞き手の生徒たちに向かって発表することである。この形を取り入れているところがすばらしい。まさに「活動を通して」学習を進めている。

（５）川村教諭、１年英語Ｉ「Lesson6 Last Chance」

粂原の参観は１４：５０～１３：００

○英語では、いかに生徒の「活動」を仕組むか、構想するかが大切

これまで私が見てきた中学校の多くの英語授業、それも外国人教師とのティームティーチングの授業は、一つのパターンに当てはまるものが多かった。

それは、陽気で賑やかで大きな声のハイな気分の外国人英語教師、それに合わせたように明るくハイな日本人英語教師。にぎやかで楽しそうな二人の教師たちなのだが、生徒の声は蚊の鳴くように小さいし、自信を持って発音をしているわけではないし、表情は暗い。次々と提示されるフラッシュカードに反応はしているのだが、主体的な英語の「学習活動」になっていないのである。

英語科の授業では、いかに生徒の活動（活き活きとした動き）を仕組むか、つまり構想するかが重要となる。

英語授業の中で、英文をノートに書く、会話をする、単語を発音する、先生や他の生徒の会話や発音を聞くことも、立派な「活動」である。フラッシュカードを多用したり、ビデオや録音機などの視聴覚機器を持ち込んだり、ゲームをしたりなど、目先の変わった活動を導入することが多いが、英語授業での言語に関する話す・聞く・読む・書くなどの基本的な活動が見直されなければならない。

○全員が一斉に発音する場面も必要か

教科書の基本的な一文を丁寧に発音する。教師のあとに続いて、一斉に発音する。声をそろえて単語のスペルをいう。これらの全員が一斉に発音する活動も、英語科の基本的な活動だと考えたい。

3「食事」と「授業における学習」の相似点

食事（食べ事）において食べ物を摂取する行為と、授業において学習内容を習得する行為は、どちらも個人の体内に物事を取り込むという点において相似する。私は、授業における3つの指導対象を説明するときに、この相似点に着目して、次のような説明を試みてきた。

授業において教師が指導しなくてはならない事柄は、次の三つである。

a．1時限の授業ごとに変化発展する「学習内容」

食事においては、調理されて提供される料理（食べ物）に相当する。たとえば、レストランでハンバーグを食べる場面を想定していただきたい。ハンバーグの材料が豚や牛のひき肉であり、玉ねぎのみじん切りであり、卵・胡椒・塩などが調味料や隠し味として使われているとしても、それらの食材や調味料などがそのままの姿や形でテーブルに並べられたとしたら、旺盛な食欲も萎えてしまう。

教科書の記述をそのまま教え込んだり、教師の準備した学習プリントに教科書の言葉をそのまま書き込めば済んでしまうような学習であったりすれば、子どもの学習意欲が高まることは期待できない。

目の前に出される料理が、まずはおいしそうに見えたり、良いにおいを発散していれば、子どもの食欲は湧こうと言うものである。まずは、学習内容そのものに、子どもの学習意欲を掻き立てるような工夫がしてあることが重要である。子どもの既知既習の知識や技能の実態を良く見るとともに、教師の教材解釈力や発問構想力が問われるレベルの問題である。

ｂ．その教科・領域に独自の「学習方法」

レストランでハンバーグ料理を自分の力でおいしく食べるためには、ナイフとフォークの使い方を習得しておかなくてはならない。まずは、右手にナイフを持ち、左手のフォークで押さえながら、自分の好きな大きさに切り分けることができなくてはならない。そのあとで、切り分けたハンバーグをフォークで口に運ぶのである。付け合わせのジャガイモ・人参・つゆ豆も、適当な大きさにナイフで切り分け、フォークで口に運ぶ。このナイフやフォークの使い方は、その教科（国語や算数・数学など）や領域（道徳・特活・総合）に独自の学び方に相当する。

このナイフやフォークの使い方に、子どもたちが一度習熟しておけば、ハンバーグを食べるときだけではなくて、あとはビーフステーキを食べる場合でも、ビーフシチューを食べる場合でも、応用が可能となる。さらに初めて食べることになるどんな西洋料理であっても、もう恐れることはなくなる。国語や算数（数学）の学習方法（勉強の仕方）を身につけると、初めて出会うことになる単元や教材であっても対応できはじめる。教師は子どもたちに、このレベルの学習方法をも指導しなくてはならない。

ｃ．どの教科・領域にも共通する「学習規律」

学習規律とは、授業参加のためのルールやマナーやエチケットである。規律ないしは規範をあらわす言葉に「norm」がある。それに、形容詞をつくる語尾「-al」を付け加えると「normal」となる。もちろん「ふつうの、一般的な」の意味合いをもつ言葉である。学習規律ないしは学習規範は、特別な事柄を上から教師が教え込む事柄ではない。そうではなくて、学習活動が成立するためには、ごく普通に、どこの教室においても一般的に実現しなくてはならない「学習するための当たり前の準備や構えや姿」を作り出すために学習規律をも指導しなくてはならない。

そのことを食事に当てはめるならば、たくさんの人数で楽しく会食をしている場面を思い浮かべるとよい。ノーマルな（普通の）テーブルマナーが守られないことには、たくさんの人数で楽しく食べ物を食べるといった最低限のことも実現できなくなるのである。

４．授業で育てる「三つの学力」

授業で育てる学力は、栗原の言う「３つの指導対象」に対応する。

ａ．内容学力＝測定可能なテスト学力

ｂ．方法学力＝自主学習力、応用力

ｃ．規律学力＝授業参加のルールやマナーなどの態度学力
　　　　　　＝授業における道徳

５．授業改善のポイント

ａ．学習準備も指導のうち

①チャイムの合図で授業が始まる

1年間の授業時間数を1000時間と仮定すると、毎回の授業が1分ほど遅れて始まる学級では1年間あたり1000分のロスが生じる。これを50分授業に換算すると、1年間で20時限の授業時間のロスに相当する。

栗原が関与している「優れた学級の授業の始め方」は次のとおりである。

その1、田川学級（鳥取県西伯郡伯耆町立日光小学校3・4年複式学級）

授業開始の定刻になると、日直が教師に対して「先生、授業を始めてもいいですか」と尋ねる。担任の先生が「いいですよ」と答えたら、授業は即座に始まる。授業の始まりの時刻を判断するのは、日直である。

その2、二宮学級（大分市立稙田（わさだ）小学校2年）

給食と遊び時間のあとの掃除が終わると、子どもたちは自分の力で静かに着席する。そして、自分で学習の準備をする。中には、教科書を音読したり、ノートに日付や題名を書いたりしている子どももいる。そうするうちに、教科書の音読の声もしはじめた。

授業開始の定刻になると、「日直さん、お願いします」という子どもたちの大きな声が聞こえてきた。この言葉を聴いた日直が、授業始まりの挨拶と合図をする。

この授業の始まり方も、子どもたちの自主的な判断による。それも大多数の子どもの判断によって行動が起こされる。

上記の「その1」の事例との違いは、時刻の判断が、日直以外のすべての子どもたちによってなされている点にある。見事な授業の始め方であり、見事な子どもたちではある。

②学習準備

机の上に教科書とノートを出して、各自の音読が始まる。

b．黒板は最も説明しやすい場所
一生徒に黒板を開放すること

中学校数学の図形の授業で、教師から指名された生徒たちが、自分の席から言葉だけを用いて、黒板に描かれた図形を説明している場面に出会ったことがある。まずは、生徒たちに黒板を開放して、生徒が黒板の図形を使いながら説明をすると、見聞きしている他の生徒たちは分かりやすい。

黒板は、他の生徒を説得するためには最も都合の良い場所である。

生徒みずからがチョークを持ち、図形を描き、指示棒を使って説明すると、聞いている生徒からも違った考え方や意見が出されるようになる。

c．音読は最も簡単な「学習活動」

現代社会の授業で西岡先生は、生徒の一人に指名をして、教科書の「プライバシーの権利」の部分を音読するよう指示した。すると女子生徒が自席で音読をし始め、そのほかの

生徒が教科書を目で追った。

このように音読は、どの教科においてであれ、生徒たちにとっても最も取り組みやすい活動である。活動とは、文字通りの「活き活きとした動き」である。音読活動により、生徒たちは、教科書の特定のページや行に着目して集中し始め、書かれている文章の意味を考え、音読のあとの教師の発問にも集中する。

授業においては、もっと音読が多用されてよい。

d.「ノートづくり」を学習の中心に位置づけよう

学年始めの最初の日、つまり始業式や入学式の日は、子どもたちが最も学習への意欲を燃やして登校してくる日である。けれども、多くの学校では、教室の掃除や始業式への参加、入学式の準備などの、いわゆる学習以外の仕事に明け暮れてしまう。

近年の「学年初め授業研究会」(注5) では、子どもたちが登校してきた最初の日には、学級担任（あるいは教科担任）として、必ずノートを渡して「第1号」などの番号をつけて、簡単なノート学習を行い、宿題を出すことを奨励している。

近年、国語や算数の授業で学習プリントを多用する授業が増えている。これには、教科書会社がコピーして印刷するのを前提とした「学習プリント」のための別冊本を作成していることにも起因する。

多くの学習プリントは、教科書の記述を書き込めば出来上がるような内容である。子どもも教師も、このプリントに記入すると、いかにも学習した気持ちになるらしい。このプリント学習を乗り越えて、子どもたちが自分の力でノート作りを進めることが可能となるような指導が必要となってくる。ハサミと糊は、ノートづくりを中心とした学習活動を進めるための重要な道具である。(注6)

e．家庭学習（学習習慣）も教科経営のうち

小学校や中学校の教師の口からも、「この地域の子どもには学習習慣が身に付いていない」とか、「この学校の子どもは家庭学習をしてこない」などの言葉を耳にすることがある。また、「この学校の子どもの学習態度はなっていない」とか、「学習態度が育っていない」にいたっては、私自身の耳を疑うことすらある。

学習習慣や家庭学習だけではなくて、学習意欲さえ、私は教師が育てるべき事柄であると考えている。学習態度がなっていない、あるいは育っていないという意見に対しては、あなたがた教師の目の前の子どもの実態は、それまでにあなたがたが教育し指導した「結果」にほかならないと言うことにしている。

教材を選択し、解釈する。子どもの学習活動を誘発するための環境づくりをする。発問を構想し、指導案を作成する。子どもに発言を促し、子どもの言葉を板書の中に取り上げる。子どもたちの発表する内容や発表の仕方や発表態度を評価する（ほめる)。子どもたちが取り組んでみたくなる家庭学習を出す。翌日の朝には家庭学習のノートをチェックし評価する。努力したこと工夫のあとの見えるノートをコピーして掲示する。これらの教師の仕事の一つ一つが、子どもたちの生活や学習に大きな影響を与え、大きな役割を担っている。家庭学習はもちろんのこと、子どもたちの学習意欲や前向きの生活態度さえも、教師は育てることができるという自覚を持ちたい。

f．教職の専門性 —「一見するとおもしろくない事柄を
いかにして、おもしろくするか、取り組みやすくするか。」

ありふれた教科書の記述であっても、子どもたちが面白がってくれるような教材の解釈と再構成、発問づくりができなくてはいけない。それが、プロの教師の力量なのである。

6．今後の課題

a．本日の公開授業の

○良かったところ

経験年数が２年から４年までの若手教師が、じつに立派な授業を展開して見せてくれたこと。生徒の学習活動を意識的に仕組もうとする授業であったこと。

そのための教材解釈ができており、教科によっては生徒が意欲的に取り組む姿があったこと。

○反省点を記録に残すこと

高知商業高校では、研究会ごとに先生方に対するアンケートの実施や、公開授業や研究会の実施方法についての感想や意見などの集約が行なわれている。

また、毎年、研究集録も発行されている。

b．できれば、粂原講話の記録も

教師の研修が効率的に行われるためには、教師自身の（あるいは教師集団の）「学習の仕方（学習方法）」が問われなければならない。

講話や協議の内容を録音やビデオに収めて、それから文章化する仕事は理論をじっくりと学ぶための王道である。

c．指導の理論、
教育の理論も勉強すること

授業の実践経験だけでは、教師の授業力は上達しない。教育理論や教授学理論の習得は、一つ一つの実践経験を越えて、教師自身による指導方法の創出に寄与する。

d．公開授業を数多く、
授業力（学習指導力）は授業公開の数に比例する

新任教師のころから、つとめて数多くの授業公開を試みること。授業を公開するチャンスがあれば、必ず積極的に受けて立つこと。

そして、人の前で話すチャンスが与えられたら断らないこと。必ず要項と資料を準備して臨むこと。最高に学ぶためには、教える立場に立つことである。

e．自主的研究（教科サークル、勉強会）を組織すること
人の世話をすること、会の世話をすること

一般に学校教育とは、同一地域の同一年齢の被教育者（子どもたち）が学校に集まり、教師と共に集団生活をしながら教育内容を習得することである。学校教育の根底

には、子どもたちの世話をするという仕事がある。「子どもたちの世話」が教職の原点である。

私が担当する大学での共通教育（教養教育）講義「教育学」においては、必ず「教師を目指すのなら、人の世話になるばかりではなくて、人の世話をすることを心がけなさい」ということにしている。そして、教育学（pedagogy, Päedagogik）という言葉が、古代ギリシャやローマのパイダゴーゴス（paidagogos. 市民の子弟の身の回りの世話をして学校や塾などへの送り迎えをした賢い奴隷の名称）に由来していることを話すことにしている。人（子ども）の世話をしようとすれば、人が何を必要としているか、何を知りたがっているかを見取らないかぎり「要らぬ世話」となり、良い世話は不可能である。

子どもの世話ばかりではなくて、同僚や後輩（若手教師）の世話をする立場に立つとき、教師としての仕事も自覚も本物になろうというものである。中学校や高校教師であれば、とりわけ自分の専門教科の自主的な勉強会を組織して後輩を育て、その勉強会の世話をする立場に立てば、自らの教育実践は真剣なものとなり、本物にならざるを得ない。

f．研修＝いち早く授業指導力を修得すること

小学校や中学校において外部講師を招聘し授業を公開しながらの授業研究が、ごく当然のように開催される学校が多く見られるようになった。けれども複数学級の学年の一人だけが公開授業を担当するとか、低中高学年の一人だけが公開するなどと形式化したり、何年も授業公開をしたことがない教師が出てきたりなどの現状も散見される。

教育現場での研修は、教職にある者の権利であり、同時に義務である。そして、教師の研修は「いち早く授業指導力を習得すること」を目標としなくてはならない。

(注)

（1）筆者は1968年度に広島大学大学院教育学研究科教育学専攻に入学して教育方法学研究室に所属して以来、学校教育現場での本格的な授業研究に携わってきた。

（2）高知商業高等学校は、1898年（明治31年）5月、修業年限3ヵ年の簡易商業学校として高知市帯屋町に創立された。107年の伝統を持つ高等学校である。

平成15年4月より、新しく「総合ビジネス科」、「情報システム科」、「情報システム科」を設置し、新課程の実施が進行中である。

平成17年12月2日現在、生徒数834名、教員数63名を擁する高知県下で唯一の市立商業高校である。長い伝統とスポーツを重視する校風に支えられて、この3年間の授業研究の中で生徒たちの大半は「授業における学習規律」を身につけた。

（3）高知商業高校の第1回授業研究会における桒原講演は、2003年6月10日（木）15時10分から16時20分の間、 以下の要項をもとに行なわれた。当日配布した最初の講演要項（全4ページ）を縮小して、本論最後に「資料」として収録しておく。

（4）高知市教育委員会主催で「経験5年までの若年教員」を対象とした研修で「フォローアップ研修」と呼ばれている事業。教員の資質と指導力向上を目的としている。

（5）2005年度４月上旬には、学年始め授業研究会と称して、次の２箇所で開催した。
その一つは広島県大竹市立大竹小学校であり、約40人の参加者を得て、栗原が学年始めの授業指導について講演をした。もう一つは鳥取県西伯郡伯耆町立日光小学校においてである。ここでは、日光小学校の学級担任教師２名が目前の４月始めからの学級経営と授業指導の計画について発表し、栗原が学年始めの授業指導について講演した。伯耆町内の小中学校教師、約40人が参加した。

（6）栗原昭徳「図書館利用学習への入門授業の構想と実践―調べる授業から家庭学習・自主学習への発展―」、日本生活科・総合的学習教育学会第14回全国大会（広島大会）自由発表資料（全48ページ）に詳しい。

（資料）

高知商業高等学校
校内授業研究会

わかる授業、指導のポイント

2003年6月10日（木）15：10-16：20
栗原 昭徳（山口大学教育学部・教授）

1．参観した授業について

2．「オリエンテーション」とは

「わかる」とは

「とてつもなく　大きな　かぶが　できました。」

3．授業とは（学校で教えるとは、指導とは）
a．授業は、陶冶(Bildung)と訓育(Erziehung)の統一である

b．授業は、教授(Lehren)と学習(Lernen)の統一である

c．授業は、認識(Erkennen)と練習(Uebung)の統一である

4．授業における3つの指導対象（授業で何を教えるか）
a．1時間ごとに変化発展する「学習内容」

b．その教科・領域に独自の「学習方法」

c．どの教科・領域にも共通する「学習規律」
ア．発表の仕方（表現の仕方）
「2＋3は、いくつ？」という発問に対する発表の仕方

イ．発表の聞き方（応答の仕方）

ウ．グループ活動、リーダーの活動の仕方

エ．そのほか
授業への遅刻、私語、忘れ物（新任教師の三つの悩み）

5．教育の方法、5つの類型
a．注入

b．操作

c．指導（間接指導）
間接指導のルーツ（倉橋惣三「森の幼稚園」）

d．支援・援助

e．放任

6．授業で育てる学力
―戦後教育史の中の学力論の変遷

＊第1の教育改革＝1872（明治5）年の学制

＊第2の教育改革＝1847（昭和22）年の学校教育法
経験主義の教育「六三制　野球ばかりが　強くなり」

a．測定可能な「内容学力」、昭和30年代
昭和33年、特設道徳

b．転移する「方法学力」
ブルーナー『教育の過程』

c．自主的に授業参加のできる「態度学力」
学習集団づくり

7．21世紀の教育方法「通しての教育」
a．1989（平成元年）、幼稚園教育要領の中の「通して」
総則冒頭「幼稚園教育は、環境を通して行なうことを基本とする」

b．同年、小学校学習指導要領
生活科の目標「具体的な活動や体験を通して・・・」

c．そのほかの小学校の教科の目標中の「通して」
とりわけ、算数、理科、音楽、図工、家庭、体育などの教科の目標

d．中学校の教科の目標中の「通して」

e．高等学校における教科の目標と「通して」

8．研修の進め方
a．授業を公開する

b．「学習規律」の共通理解

c．できれば公開授業研究会を

9．高知商業高校の先生方に期待すること
a．授業の事実、生徒の学習の事実を重視すること

b．授業の理論も習得すること

c．指導のプロになれ（授業の鬼になれ）

10．お願い
できれば、栗原著『わかる授業をつくる先生』（図書文化、H14）
を高知商業の先生方の共通図書（テキスト）に！